

「私は私」

日田市立大山中学校 二年 田邊 怜羅

私は、小学二年生の夏休みが終わったと同時にこの学校に転校してきました。前の学校とは全然違う教室の雰囲気、において。校舎はできたばかりで新しく、教室には机や椅子の木の香りが充満していました。一学年が百名近い学校から、二十数名の学校への転入ということもあり、強い絆でつながった友達の輪に入れるか正直、不安しかありませんでした。皆の前で初めて自己紹介をしたときは、声が震えていたのが思い出されます。最初はクラスの子と話すことすらできなかつたけど、皆が明るく接してくれるようになったときは、すごくうれしかったです。でも、心の奥底ではどこかいつも不安で、それが完全に消えたことは今まで一度もありませんでした。

私は、イタリア人と日本人のハーフで、ムスリムでもあります。だから、給食のおかずには豚肉が使われている日は、そのおかずを食べないようになっています。もちろん、このことで、周りから悪く言

われたことはほとんどありません。ただ一度だけ、友達とケンカしたとき、「ハーフ」という言葉を、悪意を持って使われたことがあります。でも、それほどショックではありませんでした。ハーフであることに対しては、自信を持つと決めていたし、周りとの違いを誇らしくさえ感じることもあったからです。黒に茶の混じった髪の色、瞳の色や鼻の高さ、イタリア語が話せること、それらすべて自分の個性として大切なものであり、親が与えてくれた私の一部だと思っています。それらを私が認めないということは、イタリア人である父をも否定することではないかと感じます。

しかし、中学二年生になった今でも、まだ心の奥底に不安があります。もう出会って六年が経ちますが、ハーフである私を、転入生である私を、皆がどのように思っているのか、本当にクラスの仲間だと認めているのかということ。周りの人からしたら、「それだけ？」とか「なんで？」と感じるかもしれません。しかし、周りの目や本心を気にしながら生活をするのは、思っているより辛く、疲れるものです。給食の時に、皆より食べるおかずの量が一皿分だ

け違う日は、どこか心が落ち着きません。小学校六年生のとき、修学旅行の自主研修の話し合いで昼ご飯の話題になるのがいやでいやで仕方ありませんでした。同じ班の人が、昼食の店を選んでいるときに、豚肉が食べられない私のことを「めんどくさい」と思っている気がして、なるべく会話に入らないようにしていたことも、誰にも打ち明けられませんでした。

そんな中、六年生のときに参加したサマーキャンプで、他校の四年生の子と仲良くなりました。その子は私のところに来て「友達になりたい」と言ってくれたのです。どういう気持ちで言ったのかはわかりません。それでも、すごくすごくうれしかったです。その子は私に「興味がある」と言ってくれました。そのとき、ハーフである私に向けられた「気になる」視線ではなく、「興味」をもって、自分から近づいて来てくれたことが嬉しかったのだと思います。あの子は私のことを忘れているかもしれないけれど、あの無邪気さが当時の私を救ってくれました。

私がこの作文を通して伝えたいのは、「自分らしく」とか「堂々

と生きていい」という言葉があっても、自分の個性と向き合って生きることはすごく難しいということです。以前、母が私に言った言葉が私の頭を巡っています。

「人は小さい頃は、皆と仲良くしようとしたり、悪いところを見ず、目の前にいるその人自身、個性を理解しようとしたりするけれど、大人になるにつれて、色々なことを学ぶ中で、人種や性別、地位など、さまざまなフィルターを通して、人を見るようになる。そして、人の悪いところばかり見てしまったり、周りの意見に同調したりして、何が本当に正しいのかも分からなくなってしまったりして、何が本当に正しいのかも分からなくなってしまう。」

目の前にいるその人自身を見てほしい。それが何より大切だと思うのです。

私の不安がいつ消えるかは分からないけれど、それでも私は、この学校が大好きです。